

太王四神記 第5話 決勝戦の行方

2008(平成20)年2月25日鑑賞(梅田ブルク7)

★★★



監督=キム・ジョンハク／出演=ペ・ヨンジュン／イ・ジア／ムン・ソリ／ユン・テヨン／トッコ・ヨンジェ／パク・サンウォン／オ・ヴァンロック／チェ・ミンス／イ・チャンウク／ミン・ジオ／キム・ヒョク／キム・ソク／イ・ダヒ／パク・ジョンハク（2007年韓国ドラマ／59分）

……第5話のハイライトは、キョック場におけるホゲ率いる黄軍 vs. チョルロ部族の黒軍との決勝戦だが、そこにも、あるインチキが……？ 助っ人として登場したのがタムドクとスジニだが、太子であることが満員の観客にバレてしまったら……？ ヤン王が下す苦渋の決断を軸として、以降新たなストーリーが展開していくことに……。

■第5話～第8話をまとめて

08年1月2日に観た『太王四神記』第1話～第4話に続いて、今回は第5話～第8話を一気に鑑賞することに。製作費430億ウォン（50億円）、全24話からなる壮大な歴史ファンタジーは、1話ごとに興味深いストーリーが展開されるが、その内容は1話ごとにつけられているサブタイトルによって的確に表現されている。第5話『決勝戦の行方』は、キョック場で開催される撃毬の大会での、ホゲ（ユン・テヨン）率いる黄軍とチョルロ部族の黒軍との決勝戦の行方を焦点とするもの。

■ステイックにインチキが……？

ヤン王（トッコ・ヨンジェ）やヨン・ガリヨ（パク・サンウォン）たち貴族はもとより、火天会の大長老（チェ・ミンス）やキハ（ムン・ソリ）もこのキョック大会を見物中。さらに黒軍に賭けたスジニ（イ・ジア）の側には、庶民の姿に化けたタムドク（ペ・ヨンジュン）の姿も。

準決勝で黄軍は青軍の選手をたたきのめして順当に勝利したが、それを見ているタ

ムドクの目にはある疑問が。それは、キヨックの試合では「相手の馬さえ傷つけなければ、スティック（打球棒）で相手を突いても、たたいてもかまわない」というルールだが、黄軍のスティックにインチキがあるのではということ。つまり、本来スティックは空洞の竹で作るはずだが、もしそこに鉄の芯が入っていれば……？

さあ、そんな疑問が提示されると活躍し始めるのがスジニ。明日の決勝戦を控えた黄軍の幕舎に赴いたスジニは、スティックのインチキを指摘し、口止め料を要求したから、話はややこしいことに……。

■ホゲの対応は……？

もっとも、黄軍のスティックにそんなインチキな仕掛けをしたのはイルス（イ・チャンウク）で、ホゲは全然知らなかったよう。タムドクの指摘によってそれを知ったホゲは潔く「不正を申告する」と言うのだが、そうされると逆にタムドクも謹慎中の身で外を出歩いていることがバレてしまうからヤバイ。そこでタムドクの方から、お互ひ黙つていようと提案することに。こちらあたりの、同じチュシンの星の下に生まれた2人のやりとりがこの映画の見どころで、きっとこれから何度もくり返されていくはず。

その晩、イルスの不正を責めるホゲだが、翌日の黒軍との決勝戦に何としても勝利しなければならないのはイルスよりもホゲ。そこで、ホゲの暗黙の了解（？）の下にイルスが仕掛けたある策略とは……？

■朱雀の心臓がなぜ……？

他方、黄軍と青軍の試合中、なぜか長老が持つ朱雀の心臓に輝きが……。それはホゲとキハが近づいてきた時だ。すると、やはりホゲがチュシンの星の下で生まれた本当の王……？『太王四神記』全体のテーマが第5話ではこんな風に少しだけ提示されるが、その本格的展開は次の第6話、第7話に移され、第5話は翌日の黄軍と黒軍との決勝戦がハイライト……。

■こんなラフプレーもOK……？

黒軍のリーダーはチョルロ部族の長の息子セドゥル（ミン・ジオ）。そのメンバーはタルグ（キム・ヒョク）やまだ幼い補欠の（？）チャングンドル（キム・ソク）た

ちだが、今決勝戦に出場している彼らの様子は何かヘン。そりゃそうだろう。彼らは前日の晩、飲み屋で酒を飲んでいる時、数人の暴漢たちに襲われ、斬りつけられて大ケガを負っていたのだから。薬草の知識をもつ神官のキハを連れてきて彼らのキズの手当てをしてやったのはタムドク。しかし、ケガをしていることがバレれば試合に出場できない黒軍はケガを隠しての出場だから、試合が苦しいのは当然。

当初一進一退の展開を見せていた決勝戦は、途中から黄軍によるラフプレーが続出したため、何とか落馬だけは免れたもののチャングンドルもセドゥルも大量出血で、遂に審判は試合をストップ。ここで交代選手がいなければ、自動的に試合は黄軍の勝利で終了となり、万事休すだ。さあ、そんなところに補欠選手として登場したのが、兜をかぶっているため顔がはっきり識別できない2人の選手。黒軍はこの2人の活躍によって再び息を吹き返したが、今やハッキリとその1人の正体を見破ったホゲにはすごい殺氣が……。

■補欠選手は誰……？

「誰かわかるな」と目配せをしたホゲとイルスの攻撃が黒軍の「ある選手」に集中したのは当然。その結果、馬ごと体当たりされたタムドクは落馬し、兜が取れてしまったから大変。なぜなら、この試合を見学していたヤン王やガリヨたちを含むすべての観客の目に、タムドク太子が黒軍の補欠選手と偽って出場していることが白日の下にさらされることになったのだから。

こんな予想もしない結果にタムドクは潔く、「私が勝手にやったことであり、すべては自分の責任。どうかお計らいを……」とヤン王に申し出たが、ガリヨはここぞとばかり、「高句麗の王室は国の中心。ひとつの部族の肩入れはありえない」「他の部族を軽んじている」と主張した。さて、こんな切羽詰まった状況下、ヤン王の決断は……？

■ヤン王の決断は……？

ここでヤン王が下した決断は、「王の息子をすぐに投獄せよ」というもの。しかしこの命令に対しては、コ将軍（パク・ジョンハク）が「高句麗のどこにも太子を閉じこめる場所はありません」と上申し、さらにガリヨが「太子にはまず、謹慎。この事件に関しては重臣たちに意見を聞くべき……」と仲裁案を。

それはそれでいいのだが、王の命令によって黒軍の選手たちとそれに交じってスジニも一緒に投獄されることになったのはかわいそう。さらに問題は、なぜかそれがヨン家の牢獄だったこと……。もっとも、それによって以降、その脱獄を誰が、どのように実行するかが1つの焦点となることに……。

■謹慎とは名ばかり……？

他方、王家の靈廟に謹慎を命じられたタムドクは、そこを警備する近衛第3隊長のカクタン（イ・ダヒ）と「俺は用事があるから出でいくよ」と交渉中。もちろんカクタンはダメだと答えるが、よほど腕に自信があるとみえて「私との勝負に勝ったら許可する」とタンカを切ったが、さてその勝負は……？

コ将軍の部下であるこの第3隊長はえらくベッピンの女性だし、その部下もなぜか女性ばかり。さすが韓国ドラマはおじさんへの配慮も行き届いていると、妙なところで感心……。何はともあれ、第5話はこんな風に今後へ問題提起する形で終わったから、第6話、第7話では物語が急展開しそう……？

2008(平成20)年2月27日記